

わが国における英語教育と 日英言語の比較研究

矢 吹 勝 二

英語教育の3本柱

わが国の伝統的な英語教育は、英文和訳、和文英訳、英文法の3本柱に重点をおいて展開されてきた。これらのうちで、中学以上の学校教育では、英文法の基礎知識が不可欠であるにもかかわらず、大多数の学生はこれを苦手とし、英文和訳の方に興味をうばわれてしまう。そして和文英訳への関心は、英文和訳と英文法の間際に位置しているようだ。

この現象は、一体何を物語るものであろうか。日本語と英語は、生まれも育ちも全然異なる言語であるから、英語の知識を与えるにあたって、まずその相違するおもな点に気づかせる必要がある。そのために「英文法」を教えるのであって、これを「日英言語比較」と言いかえても、本質的には大差がない。

しかし、中学生のための日英言語比較の教科書や参考書はない。たとえできたとしても、それだけでは、英文和訳や和文英訳を自由にやれるようにはならない。だから結局、大学を卒業するまで、英文を日本文に訳したり、その逆手を使ったり、また時代の要請に応じて重要視されてきた英会話の練習をしたり、いろいろな方法で、あたかも目の不自由な人が、耳や足や鼻にさわって、象や牛や馬の実体を知るように、努力を積み重ねて、英語を身につけるよりほかに方法はないという人が多い。

しかし私は、このような日本における英語教育の現状をふまえた上で、これを一步でも前進させるために、語句、構文、発想の全般にわたる日英

言語比較の実例を、大学の1, 2年生に、できるだけ多く教えたらいと思う。

そういった実例は、従来の英文和訳、和文英訳、英文法、英会話などの中にも、散発的に出てくるが、私の希望するのは、それらの実例だけを適当に分類配列して教え、すでにある程度の英語の知識をもちあわせている大学初年級の学生に対し、復習、疑問解消、誤解是正、英語的発想などに役立つようにすることである。

そうすれば、総合研究とか、三位一体とかという名称のもとに、ただ単に英文和訳、和文英訳、英文法を、同時に平行的に教える従来の方法よりも、学生にとっては、はるかに新鮮で興味深いものになるだろう。

日英言語比較の方法

チョムスキーの影響をうけて、日本でも変形生成文法の研究がなされている。これは異質の言語の類似性を発見するのに役立つのは事実であるが、日本語と英語は、あまりにも異質なので、わが国における日英言語比較の研究は、断片的に、日本語の語句を中心に、類似の英語表現を見つけることに重点がおかれているようだ。

しかし、それはそれなりに成功していて、*thinking in English* だけが英語上達の *royal road* であるかのように、伝統的に主張された考え方から抜け出している。しかも、語句だけの比較研究でも、日本人と英語国民との発想の違いに、学生の注意と興味を集中させることができるのである。

このことに関連して、私が痛感しているのは、教師が学生の頭に、日英言語比較の実例を、ただ単にたたきこむだけでなく、学生自身がそれらを発見する機会を学生に与えることの、驚くべき教育的効果である。それには、具体的な二つの方法がある。

まず最初に——いわゆる「和文英訳」の練習のためでなく、日本文学作

品と、そのすぐれた英訳を、「比較研究」させる方法。この方法をとれば、大学の1, 2年生でも、日本語と英語との、あらゆる面の相違を自分で発見することができる。そして、驚き、喜び、英語に対する親近感をおぼえ、英語がほんとにわかりかけたように感じる。そういう気持を起させるには、いうまでもなく、日英言語比較の基礎知識を、前もって与えておく必要がある。

それから次に少なくとも10日間、英語だけが通用する環境（できることなら外国）で学生を生活させることである。そうすれば、でたらめの英語でも喋らなければ、日常生活が不自由だから、なんとか自分の考えを、英語で相手に理解させようと夢中になる。また一方では、相手の話す英語を、とても注意深く聞き、「なあんだ、こんなときには、そういえばいいのか」などと、日本人の発想とは異なる英語表現に気づく場合が多い。こうして、英語らしい表現や、その裏にある英語的発想を、しだいに身につけることができるのである。

以上二つの方法は、私が学生に対して、たびたび実験してえたものであるが、広範囲にわたる「日英言語比較」は、いまその資料を整理中なので、本稿では、その一部を抜萃するに止めたい。

直喩 (Simile)

「雪のように白い」as white as snow は誰にでもわかるが、日本語の直喩をそのまま英訳しても通じない場合が多い。

大仏次郎——帰郷（英訳は、*Homecoming*, tr. by Brewster Horwitz, pub. by Charles E. Tuttle Co., Tokyo, 1955）から。

(1) 黒子のやうに小さい土地だけれど。

And it's *such a tiny little place*.

(2) 筋向うの店は空家のやうに埃によごれて戸が閉って……

The shops across the way *looked deserted*. They were *dirty and their doors were shut*.

- (3) 足の脛など、杖のやうに細い印度人であった。

.....and his shins were *like two sticks*. (sticks を単数形にすれば1本足の人になる)

- (4) 大佐は、例の、木の実を嵌めたやうに固い、きびしい目附で見まもってゐたが……

The Captain fixed her with that *severe wooden-eyed look* of his.

- (5) 大佐は相変らず棒のやうに突立ってゐたが……

The Captain stood *like a stick*, as always. (「棒」を a pole と直訳すれば、怪物的な大男になる)

- (6) 道路と海との間の短冊のやうに細長い地所を、どの家も一杯に塞いでゐるのである。

For the plots were *slender strips of land* and the houses covered them entirely.

- (7) 急に強い雨が降り出して、パークの中の道路に溢れてゐた人出を、蜘蛛の子を散らすやうに、軒下や、芝居小屋の中に逃げ込ませた。

The central walk of the park was covered with visitors. But it started to rain suddenly and the violent downpour scattered them *like a troubled swarm of newborn spiders*.

- (8) 最近の物価の上り方を御覧なさい。これが、まるで晴雨計のやうに、戦況の間違ひのないところを知らせてゐる。

Look at the way prices have been going up lately. They reflect the war situation *as accurately as a barometer*.

- (9) 子供たちが蠅のやうに群がって遊んでゐるし……

.....the children played *in swarms like flies*.....

- (10) 下男から離れて歩き出すと、照明燈の上の空に、芝居の書割りのやうに大きな月が昇ってゐるのが見えた。

As he walked away his eyes were drawn to *the moon* in the sky over the park lights, *as large as a moon in a stage set*.

三島由紀夫——潮騒(英訳は、*The Sound of Waves*, tr. by Meredith Weatherby, pub. by Charles E. Tuttle Co., Tokyo, 1956) から。

- (1) 漁撈長大山十吉は、海風によく鞣された革のやうな顔を持ってゐた。

Jukichi Oyama, master fisherman,had *a face like leather well-tanned by sea winds*.

- (2) 獅子の鬣のやうな白髪をふるひ立たせ……

.....whose white hair would wave *like lion whiskers* in anger.

- (3) 読んでゐる新治の顔には、初江との仲をさかれた悲しみと、女の眞実をおもふ歓びとが、影と日向のやうにかはるがはる現れたが……

As Shinji read the note the expression on his face alternated, *like sunshine and shadow*, between the sorrow of being separated from Hatsue and the joy of having this proof of her affection for him.

- (4) 珠のやうな子供が生れるといふ夢を見たのである。

In the dream.....Then they had been happily married and had had *a jewel-like child*.

- (5) 焚火のまはりにひしめいてゐるたくさんの乳房のなかには、すでに凋んだのもあれば、乾いて固くなって干葡萄のやうに乳首だけが名残をとどめてゐるものもあったが……

Among the many breasts jostling around the fire there were some which already hung slack and others whose last vestiges remained only *in form of dry, hard nipples*.

- (6) かれらは命綱と新らしい細綱を、鼠が餅を引くやうに、船橋から船首の杭まで、徐々にころがしたり引きずったりして運んだ。

Like mice tugging a rice cake, they rolled and dragged a life-line and a new marline along with them step by step from the bridge to the bow bitts.

英訳しにくい日本語

日本語の会話の表現や俗語の中には、英訳できないもの、たとえてきてもニュアンスが多少ちがうものが多い。

Anthology of Japanese Literature (2 vols, pub. by Charles E. Tuttle Co., Tokyo, 1956) の compiler であり editor である Donald Keene は、vol. 1 の preface の中で、こう述べている。——

Puns, allusions, repetitions, and incommunicable stylistic fripperies have also been discarded whenever possible.

なぜなら、.....the translations in this book are meant to be literary and not literal. とも述べられているからである。

谷崎潤一郎——蓼喰ふ虫 (英訳は、*Some Prefer Nettles*, tr. by Edward G. Seidensticker, pub. by Charles Tuttle Co., Tokyo, 1955) から。

- (1) (犬の話) 「あれを運動させるには自転車へ乗って引っ張るのが一番いいんだ。何しろ競馬に出る犬だから。」

「競馬じゃあないでしょ、競犬でしょ小父さん。」

「やられたね、一本。」

“The best way to exercise him is to lead him along on a

bicycle. Greyhounds run in horse races, you know.”

“You must mean dog races,” Hiroshi corrected.

“*You have me there.*”

(2) だがほんたうに惚れ合った仲なら、大蒜の匂ひぐらゐ何でもない筈だがな。それでなけりゃうそですよ。」

「御馳走様。何を奢って下さるの?」

「さう先廻りされちゃ困る。ま、トーストでも上って下さい。」

But when two people are really in love, a slight smell of garlic makes no difference. If it does, *they're only pretending.*”

“*This with reference to your own success? And what do I get for being your audience?*”

“*Aren't you quick with your conclusions! Possibly I do owe you something, though—how about a piece of toast?*”

大仏次郎——帰郷（英訳は前と同じ）から。

(1) 「……昼間はよいが、夜はジョホールの辺が近頃、物騒のやうな情報が入ってゐる。」

「何か出るのでせうか。」

「それア……」

と、大佐は、初めて笑って見せて、

「ゲリラも出るが、あの辺は虎の出る名所だ。」

「可怖く御座いませんわ。虎でしたら、皆さんのを拝見して慣れてをりますもの。……この今西中尉も虎の方では、なかなか有名で御座います。」

“You mean something mysterious?”

“Not ghosts exactly.” He laughed for the first time.

“Guerrillas appear, for one thing, and so do tigers—that district is famous for them.”

“Oh, I’m not afraid of tigers. *I’ve grown used to them from seeing everybody’s trophies.Lieutenant Imanishi here is a very famous tiger-hunter.*”

原文の「虎」は、「酔っぱらい」(a drunkard; 米俗 a boozier; 大酒を飲む hit the booze) を意味する俗語であることを知らなかった訳者は、trophies だの tiger-hunter だの、とんでもない訳語をあてている。そこで、次のように書きなおしてはどうだろうか。

“Oh, I’m not afraid of tigers *if you mean human tigers*. I’ve grown used to them *at dinner parties*.Lieutenant Imanishi here is well-known *for his hitting the booze and rioting like a tiger.*”

(2) わびとかさびとか, 西洋人の企て得なかった美の世界を日本人が発見したのは、やはり、貧乏だった結果のやうに恭吾は見た。人間の意欲をほしいままにした贅沢の出来ない素質の民族だから、意欲を殺して貧しい中に自ら楽しむことを工夫したのではなかろうか。

It was because they were so poor, Kyogo saw, that the Japanese had discovered a world of beauty unknown to Western aesthetics and called it by names suggesting *melancholy and unfulfillment*. They had been denied the luxury of really satisfying their human desires, so they had suppressed them and found ways to enjoy poverty.

「わび」「さび」「しぶみ」は英訳できない。これは言葉の問題ではなく、文化、思想に根深くかかわることで、こういった考え方が、英語国民にはないからである。

いつぞやアメリカの月刊雑誌 *House Beautiful* が、全巻日本特集を出して大好評を博したことがある。そのとき「しぶい」美的要素が、次のよ

うに解説されていた。

The Japanese are a sensitive, deeply emotional and poetic people.The key word in their aesthetic vocabulary is *shibui*, an adjective which denotes the ‘ultimate in beauty,’ the ‘extreme awareness of beauty,’ the ‘severe exquisiteness.’ It is a word which has no equal in Western languages and it is hard to explain.Embodied in the concept of *shibusa* are such attributes as simplicity, implicitness, humility, silence, naturalness, uneventfulness and roughness.....

三島由紀夫——潮騒（英訳は前と同じ）から。

(1) 「宮田の照爺ももうろくしたもんやなア。娘を傷ものにされ、気がつかんどのでなア」

「久保の新治はうまいことやったやないか。子供や子供やと思つとるうちに、ちゃんと油揚をさらって行ったでなア」

“Uncle Teru Miyata really must be *in his second childhood*. He doesn’t even know his *girl’s become a cracked pitcher.*”

“That Shinji Kubo——*didn’t he pull a fast one though? While everybody was thinking he was such a kid, there he went and stole her right from under Uncle Teru’s Nose.*”

(2) この悲劇的な恩着せがましい手紙は、人のよい母親をふるへ上らせた。

This tragic, *demandingly badgering* letter sent chills up the kind-hearted mother’s spine.

主 語

主語のない日本文の英訳を見ると、主語があったり、原文とはちがう言

葉が主語になっている場合が多い。これは、日本文と英文との、根本的な構造のちがいに根ざしている。

大仏次郎——帰郷（英訳は前と同じ）から。

(1) 境内に一步入ると、夕日をあびて満開の白色の木蓮の花と、これに向ひ合って咲く吉野桜の、空の藍色の中に泛んだ華やかな姿が思はず恭吾を立ち止らせた。

この文の主語は「姿」だけであるが、次の英訳文には、イタリック体の語が主語になっている。

They stepped inside and Kyogo was paralyzed for a moment by the splendor of the scene. A magnolia tree, its white flowers in full bloom and flooded with afternoon sunlight, rose against the dark-blue sky opposite the single blossoms of a cherry tree.

(2) 「如何です？」

と、画家は連れを振り返り見た。

「なかなか景色の好いところでせう。」

この文の主語は、「画家」だけで、かぎかっこ内の主語は省略されている。こういった日本語の語法は、極めて普通のことであるが、英文ではそうはいかない。you, I などの主語が入り、省略されるのは述部の一部である。その英語的習慣が、無意識のうちに身につけているアメリカ人にしてみれば、次のような間違った英訳をしたのも無理からぬことだ。原文では、画家（小野崎公平）が、ひとりで喋っているのに、英訳文では、そばにいる女性（高野左衛子）が返事をしている。

“What do *you* think of it?” the painter turned and asked his companion.

“Oh——*I* think *it's* a beautiful sight,” *she* answered.

上の訳文の後半は、こう訂正したらよからう。“A beautiful sight,

isn't it?"

川端康成——雪国（英訳は, *Snow Country*, tr. by Edward G. Seidensticker, pub. by Charles E. Tuttle Co., Tokyo, 1957）から。

(1) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。

この文の主語は「底」だけで、これをそのまま主語にした英文は書けないので、次のようになっている。

The train came out of the long tunnel into the snow country,
The earth lay white under the night sky.

(2) 「駅長さん、私です、御機嫌よろしうございます。」

「ああ、葉子さんじゃないか。お帰りかい。また寒くなったよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていただいてをりますのですってね。お世話さまですわ。」

「こんなところ、今に寂しくて参るだろうよ。若いのに可哀想だな。」

日本語を勉強している英米人は、上のような挨拶のしかた、つまり主語ぬきの会話で、意味が通じるのを不思議に思う。主語は「弟」だけしかないのに、と。

“How are *you*?” the *girl* called out. “*It's* Yoko.”

“Yoko, is *it*. On your way back? *It's* gotten cold again,”

“*I* understand *my* brother has come to work here. Thank you for all *you've* done.”

“*It* will be lonely, though. *This* is no place for a young boy.”

谷崎潤一郎——蓼喰ふ虫（英訳は前と同じ）から。

(1) 「じゃあ要さん、行って来るからね。」

「御きげんよろしう。まあ、ほんとに、お天気をつづくのが何よりです。……お久さんも日に焼けないやうにして、……」

と、笠の内で茄子歯が笑って、

「奥様によろしう云うとおくれやす。」

「つづくのが」の「の」と、「お久さん」と、「茄子歯」が主語として使われているが、「歯が笑う」という日本味の表現は、英語にはない。

“Well, Kaname, *we'll see you later.*”

“Take care of yourself. *I only hope the weather holds for you. And don't let O-hisa get sun-burned.*”

O-hisa laughed softly, her dark front teeth showing under her deep cone-shaped sunshade. “Give my best to Misako,” *she* said.

(2) 明け放たれた二階の縁からは船着き場に沿うた一とすぢの路をへだててもう暮れがたの海のけしきが展けてゐた。

この文では、「けしき」が主語、次の英訳文では *they* (人間) が主語。

Through the open second-floor window *they* could see the harbor in the gathering dusk, separated from them by only the waterfront road.

三島由紀夫——潮騒（英訳は前と同じ）から。

(1) かうして燈台長のところへたびたび魚を届けに行くのは、燈台長に恩義を感じてゐるからである。

この文には主語はないが、訳者は前文から想像して、*the boy* を補っている。

The boy often brought fish in this way to the lighthouse, feeling a debt of gratitude toward the lighthouse keeper.

(2) 新治の風呂は早かった。銭湯の入口で、母親が女風呂の入口から出

てくるのを待った。

「風呂」を主語にして、「早かった」とは、いかにも日本語らしい表現だが、英語では人間が主語になっている。

Shinji soon finished his bathing and waited before the bath-house entrance for her mother to come out of the women's side.

翻訳調の日本語の英訳

「何が彼女をそうさせたか」という表現以来かどうか知らないが、へたな英文和訳調の語法が、かなり日本語に浸透してきた。そんな文は英訳しやすいが、必ずしも、どれもこれも、そのまま英訳できるとはかぎらない。

三島由紀夫——潮騒（英訳は前と同じ）から。

(1) 昼のあひだは、燈台は死んでゐた。

The lighthouse was dead during the daytime.

(2) 女の坂を曲ると、その風さへ死んで……

……even that small *wind died away*……

(3) ……懐中電燈の明りは、とびたつた鳥のやうに、急に松の幹から梢へ翔けた。

The beam of the flashlight soared like a startled bird from the base of the pine trees up into the treetops.

(4) 百段目あたりのところで、石段には左右からさしだした松の枝のため、暗い影がうづくまってゐた。

About halfway down the stone steps *there crouched a black shadow*, caused by the pine branches that hung over both sides of the stairway there.

(5) 燈台では、最上の御馳走がお客様であつた。……事実彼がしばしば云ふやうに、「悪意は善意ほど遠路に行くことはできない」のである。

At a lighthouse there can be *no greater treat than to have visitors*.Actually, it was just as the lighthouse-keeper so often said: "*Bad intentions cannot travel as far as good.*"

- (6) 海女の習慣が、水に濡れた全身を火に乾かすことに、さして彼女を躊躇させなかったものらしかった。

Diving women are accustomed to drying their entire bodies at a fire upon coming out of the water.

- (7) 決して色白とはいへない肌は、潮にたえず洗はれて滑らかに引締り、お互ひにはにかんであるかのやうに心もち顔を背け合った一隻の固い小さな乳房は、永い潜水にも耐へる広やかな胸の上に、薔薇いろの一隻の蕾をもちあげてゐた。

Her skin, far from fair-complexioned, had been constantly bathed in sea-water and stretched smooth: and there, upon the wide expanse of a chest that had served for many long dives, two small, firm *breasts* turned their faces slightly away from each other, as though abashed, and *lifted up two rose-colored buds*.

文 の 長 さ

文の長さは、時代と共に短くなる。これは日本文でも英文でも同じである。私はそのことを、1949年の夏に、たまたま New York 滞在中に知った。週末の appointment が、相手の都合で駄目になり、しかも雨降りの日だったので、新聞を買ってきて、一日中ベッドに寝ころんで、センテンスの中に含まれる語数の計算をして知ったのである。

そのあと日本に帰ってから、他の英字新聞や単行本などについて、同様の調査をしてえた統計によると、現代英文のセンテンスの中に含まれる単語の数は、11~30語が最高率を示し、古い文体では40語以上で1文をなす

率がかなり高い。

たとえば、古い文体では、Ralph Waldo Emerson (1803-82) の *Shakespeare: or the Poet* では、40語以上の sentences が16%あり、Robert Louis Stevenson (1850-94) の *Walking Tours* にも、40語以上の sentences が18%を占めている。しかも偶然の一致ではあるが、これらの両作品の中には、100語以上の sentences が二つづつ含まれていることを知って驚いた。

日本文の中にも、次のように長い文が例外的にあるが、その英訳文をみると、適当な長さの、いくつかの sentences に分けられている。

川端康成——雪国（英訳は前と同じ）から。

あんなことがあったのに、手紙も出さず、会ひにも来ず、踊の型の本など送るといふ約束も果さず、女からすれば笑って忘れられたとしか思へないだろうから、先づ島村の方から詫びかいひわけを言はねばならない順序だったが、顔を見ないで歩いてゐるうちにも、彼女は彼を責めるどころか、体いっぱいになつかしさを感じてゐることが知れるので、彼は尚更、どんなことを言ったにしても、その言葉は自分の方が不真面目だといふ響きしか持たぬだろうと思って、なにか彼女に気押される甘い喜びにつつまれてゐたが、階段の下まで来ると、

「こいつが一番よく君を覚えてゐたよ。」と、人差指だけ伸した左手の握拳を、いきなり女の目の前に突きつけた。

なんと息の長い文であろう。もちろん英語の単語の数をかぞえる場合とちがって、日本文の語数計算では、かなをひとつひとつかぞえるので、上の文の語数は276となる。しかし次の英訳文は、6 sentences に分かれており、各センテンス中の語数は、少ない方から順にならべると、6, 12, 16, 17, 20, 28, 49で、その平均は21強となる。

In spite of what had passed between them, he had not written

to her, or come to see her, or sent her the dance instructions he had promised. She was no doubt left to think that he had laughed at her and forgotten her. It should therefore have been his part to begin with an apology or an excuse, but as they walked along, not looking at each other, he could tell that, far from blaming him, she had room in her heart only for the pleasure of regaining what had been lost. He knew that if he spoke he would only make himself seem the more wanting in seriousness. Overpowered by the woman, he walked along wrapped in a soft happiness. Abruptly, at the foot of the stairs, he shoved his left fist before her eyes, with only the forefinger extended.

“This remembered you best of all.”

アクセント

英語のアクセントは強弱を，日本語のアクセントは高低を，それぞれ示すことになっている。そして英語の場合には，たとえば，accent [æksent] のように，母音を強め，また responsibility [rispɒnsəbɪliti] のように，primary accent のほかに，secondary accent をもつ単語もある。

しかし日本語のアクセントでは，母音を含むいくつものシラブルの連続が高く発音されたり，複合語のアクセントが，もとのそれぞれの語のアクセントと異なる場合が多く，また secondary accent というものがない。

たとえば――

ラジオ RAjio	radio
放送 hoOSOO	broadcating
ラジオ放送 raJIO-HOosoo.	radio broadcasting

日本語をローマ字で書くときに，アクセントのあるシラブルは大文字にし，また長母音は母音字を重ねるのが，私の方式である。なぜそうするかといえば，大文字と小文字の使いわけをしなければ，アクセントの位置が

わからないし、またヘボン式や訓令式のように、長母音字の上に横線を引いたのでは、その長母音の中の前と後の音の高低を区別することができないからである。たとへば、hōsō と書いたのでは、前のōも後のōも同じ高さで長く発音されることになるが、実際はそうでなく、前のōは前低後高の oO であり、後のōは共にアクセントのある高い調子の OO である。

シ ラ ブ ル

日本語では、次の例が示すように、母音だけ、または子音+母音、または撥音（はねる音、ン）、または促音（つめる音、小さく「っ」と書く）が、それぞれひとつのシラブルを形成することになっているから、英語のシラブルとは、性質が著しく異なり、したがって発音のしかたも、日英両語ではちがうことになる。たとえば――

日本の経済的発展は目ざましい。

（日本人の正しい読み方）ni-(p)-PO-n no ke-I-ZA-I-TE-KI HA-(T)-TE-N WA me-ZA-MA-SHI-i. (合計21シラブル)

（日本語に慣れないあるアメリカ人の読み方）NI-pon no KEizai-teki HA-ten wa ME-zamashii. (合計10シラブル)

(p) や (T) は促音で声に出さないが、one syllable を形成することを示している。この発音は、英語国民にとって、とてもむずかしいので、かなり日本語のうまい英米人の中にも、NI-pon, HA-ten のように喋る人が多い。

結 論

わが国の英語教育は、一世紀にあまる長い歴史をもっていて、その大半は欧米文化の輸入を目的として続けられた。したがって、英文の読解力の養成に重点がおかれ、数万点に及ぶ英文書が日本語に翻訳出版されている。

しかし戦後の日本は、急速な経済発展をとげ、今や軍備をもたない第一級の文化国家として、先進国との協力関係を増進すると共に、発展途上国に対しても、援助の手をさしのべる責任を負わされている。

このような国際関係の各分野で、今日の、そして将来の、多くの日本人は、世界で最も広く普及している英語を使って活躍するわけであるから、受動的な英文読解力と共に、能動的な英語表現力、すなわち英会話や英作文の能力をも持っていなければならない。

戦後、英会話の教育や参考書の出版が、さかんになったのは喜ばしいが、今だに大学を出ても、自由に英語が話せない者の多いのが現状であるから、英文手紙が満足に書けないとか、英字新聞が気軽に読めないとかというもの、しかたがないと、あきらめる向きもあろう。しかし、日進月歩の人間生活で、現状維持はとかく退歩を意味しがちであるから、学校の英語教育も、漸進的に改善する必要がある。

そもそも教育というものは、工場の機械設備などとちがって、どんなにすぐれた人の理想であっても、現状を無視して、抜本的、革命的に変更すべき性質のものではなく、新時代の要求にかなうものをプラスし、もし時代錯誤的なものがあれば除去すればよいのだ。

私は今日までの10年間、大学生に英語を教えてきた経験から考えて、そのプラスすべきもののひとつが、大学初年級の学生に対しては、日英言語比較の知識であると思う次第である。